

## 国立民族学博物館研究報告別冊 no.021; まえがき

著者	吉岡 政?, 林 勲男
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	021
ページ	i-iv
発行年	2000-03-21
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009081">http://hdl.handle.net/10502/00009081</a>

## まえがき

吉岡 政徳・林 勲男

本論集は、1995年度から3年間にわたって行われた国立民族学博物館の共同研究「オセアニア近代史の人類学的研究」（代表者：吉岡政徳、副代表者：林勲男）の成果報告書である。この共同研究は、オセアニア世界が西洋と接触して以来の歴史的過程をオセアニア近代史と位置づけ、その歴史的過程の中で生じてきたキリスト教の布教活動、植民地化、社会変化、開発、国家形成など様々な出来事を、西洋の歴史認識からではなく、オセアニア世界の側から捉え直すことを目指したものである。

ところで、周知のように、オセアニア近代史を巡っては、トーマスらの歴史人類学が大きな成果を収めている。そこでは、従来の人類学がとってきた「伝統」と「近代」、あるいは「彼ら＝非西洋」と「我々＝西洋」という二分法が痛烈に批判された。それは、植民地化という現象を、どちらか一方の側からの作用として見るのではなく、歴史のもつれ合いという両者のからみの中から考えようとする立場からの指摘であった。この視点は、従来の人類学的研究に対する重要な批判であり、本論集を構成している論文の多くは、こうした歴史人類学からの提言をどう受け止め、どの様に考えていくのかということと関わっていると言える。

しかし、3年にわたる共同研究は、オセアニアにおける歴史人類学の整理に汲々としてきたわけではない。人類学だけではなく、社会学、歴史学、国際政治学、国際関係論などの隣接科学を交えながら、いかにしてオセアニア近代史をオセアニア世界の歴史として論じるのかということを考えてきたのである。この立場は、「彼ら」と「我々」の二分法を批判した歴史人類学の視点に逆行し、再び「彼らの世界」を強調する立場に舞い戻っている様に思えるかもしれない。しかしそうではない。歴史人類学で批判されてきたのは、流入してきた西洋的な要素をはぎ取った伝統的島民文化を見いだそうとする立場であり、西洋との絡み合いを考慮にいれた上でのオセアニア世界からの歴史を語ることは、やはり、重要なことなのである。

さて、本論集は6つの章からなっている。第1章「歴史と人類学」は人類学が歴史とどうかかわるのかという問題を取り上げており、本論集全体の序章にあたる。この章を構成している吉岡論文は、トーマスの歴史人類学を踏まえながらもそれを批判的に検討することによって、歴史と関わる人類学を新たな位置から捉えようと試みてい

る。

第2章「西洋のオセアニア観」では、オセアニアと接触した西洋世界がオセアニアをいかに捉えたのかという問題が扱われている。オセアニア世界の側から近代史を見直すためにも、西洋世界の側の捉え方の把握が必要なのは言うまでもない。2章を構成する2つの論文のうち最初の中山論文は、アメリカにおける19世紀の新聞記事を題材に、ポリネシアとメラネシアを文明と野蛮という対比で捉えた西洋的視点のからくりを明らかにしている。一方、林論文は、同じく19世紀の「肘掛け椅子人類学者」に与ったの情報提供者であると同時に、膨大な収集品を残した宣教師の一人、ジョージ・ブラウンに視点を合わせ、彼の捉えた太平洋について議論している。

第3章「西洋との接触」では、西洋世界と接触することによってどのような歴史経験がオセアニア世界の側で生じたのかという点に視点を合わせた論考が納められている。最初の窪田論文は、ヨロンゴという特定のアボリジニ社会を対象に、そこにおいて展開された伝道活動を他の地域と対比しながら、それと対処する人々の独自の歴史経験を描こうとしている。続く槌谷論文では、バブアニューギニアにおけるファースト・コンタクトを取り上げ、人々が白人を霊として見たという言説を考察している。そして槌谷は、フォイ社会を例として、この言説は西洋と土着の相互作用の中から生まれてきたものであることを論じていく。最後の田井論文では、西洋と接触する過程で、ソロモン諸島の人々が音楽芸能においてどのような戦略をとったかについて考察し、外部の音楽芸能を取得し効果的に発揮することは、西欧近代に対峙する人々にとって重要な戦略となっていたと論じる。いずれの論文も、歴史のもつれ合いを念頭に置いた論考である。

第4章「植民地時代と現在」では、植民地時代に形成されたものが、独立国家として成立している現在、どのような意味を持っているのかということを検討している。最初の豊田論文は、メラネシア地域において広く使われているピジン語を取り上げ、成立当初は植民地主義的な性格を持っていたが、現在では、メラネシア住民のアイデンティティ形成のよりどころとして反植民地主義的な性格を持つようになった現実を分析している。二つ目の藤川論文は、オーストラリア先住民であるアボリジニを取り上げる（藤川の呼称ではアボリジナル。なお、アボリジニとアボリジナルという異なる呼称の存在については、窪田論文の付記、及び、藤川論文の注1を参照のこと）。藤川は、監獄でのアボリジニの死亡件数の多さに関する調査記録を出発点とし、アボリジニ社会がオーストラリア国家の法体系の中でおかれている状況を、その植民地時代から現在までの歴史的背景を検討しつつ考察している。最後の山路論文は、バブア

ニューギニアにおける小学校教育を取り上げ、植民地時代に作られた学校が、現在は、植民地時代の影響を残しつつ、国家から要請される近代知と村落レベルにおいて必要な民俗知のせめぎ合いの場ともなっている現状を分析している。

第5章「開発と住民」では、オセアニア近代史の過程で顕著な現象となってきた開発をめぐる問題が議論されている。5章を構成する4つの論文のうち最初の関根論文はソロモン諸島を取りあげ、同国における「持続可能な開発」という開発言説や都市住民の出身村落との関係のあり方に注目しつつ、ソロモン諸島民が「近代」の産物としての都市と経済開発に対してどのような関係を構築しようとしているのかを考察している。二つ目の宮内論文もソロモン諸島を議論の対象とし、同国マライタ島における出稼ぎや移住の歴史をひもときながら、世界システムに対する住民戦略を考察している。三つ目のアレキサンダー論文では、フィジーにあるマグロ・カツオ缶詰工場に焦点をあて、大型漁業という開発戦略における、環境、開発、ジェンダーという問題を内発的安全という文脈から考察している。本章最後の佐藤論文でもマグロを巡る開発が議論の対象となっているが、ここでは日本の政府開発援助である水産 ODA がオセアニアの人々の日常生活にどのような影響を及ぼしているのかを問題としている。

第6章「近代史の中のオセアニア国家」は本論集の最後の章として、オセアニア国家が近代史の歩みの中で到達した地点とかがえる問題点を考える。最終章を構成する三つの論文のうち最初の小林論文は、かつての国連信託統治領ミクロネシアを取り上げる。同地域は4つに分裂しそれぞれ自治、独立の道を歩んだが、その結果、経済的發展地域と停滞地域との二極分化が出現したという。小林は、この二極分化の背景とその原因を追究している。続く内藤論文では、ニュージーランドを取り上げる。ニュージーランドの近代の幕を開けたワイタンギ条約は英語とマオリ語で書かれており、両者に微妙なズレがあると言われてきたが、近年、マオリ語版ワイタンギ条約が同国で息を吹き返しているという。内藤はこうした状況を踏まえて、条約を巡るヨーロッパ系住民とマオリの駆け引き、及びマオリの戦略を考察している。6章最後の山本論文は、近代史の中で東西に分断されたサモアを取り上げ、東のアメリカ領サモアと西の独立国サモアの対比を通じて見えてくる問題点を論じている。山本は、ともに同じ社会組織と文化を共有していたにもかかわらず、ニュージーランドとアメリカという異なる宗主国をもったという歴史が、両者に与えた影響とその受容のあり方を分析している。

以上の16編の論文は、オセアニア近代史というものを各人の視点から比較的自由に

論じてもらうという編集形式を踏んでいるため、特定の歴史観、あるいは、学説に貫かれたものとはなっていない。しかし、すでに述べたように、歴史人類学からの人類学批判を踏まえた上で、オセアニア世界の側から近代史を見直そうとする姿勢は一貫していると言える。その結果、本論集では、近代史を歩んできたオセアニアが、西洋世界との遭遇をどのように受け止め、それにどのように対処しつつ自らの歴史を作ってきたのか、また、近代史の一つの到達点でもあった独立がどのような意味を持ち、それが現在どんな問題を提起しているのか、というオセアニア世界における連続した歴史経験を見据えた議論を展開することができたと考えている。